国士館大学新聞

題字は創立者
柴田德次郎筆
発行所
学校法人国士館
〒154-8515東京都世田谷区世田谷4-28-1
編集　広報課
☎ 03-5481-3115

地方・中都市の自然災害対策

犠牲者ゼロ目指し

国家的研究開発の一翼担う

理工学部　横内 基教授
（防災・救急救助総合研究所研究員）

横内教授。専門は建築耐震構造、地域防災

線状降水帯の頻発など、近年激甚化する自然災害に対し、国はさまざまな施策を講じている。内閣府が進める「国家レジリエンス（防災・減災）の強化」の研究開発のひとつとして、国士舘大学、群馬大学、小山工業高等専門学校の合同研究チームが令和３年度から２年間、「地方・中都市を対象とする災害時最適オペレーションの開発」に取り組んだ。研究代表の本学理工学部横内基教授に、研究開発について、そして防災と大学のこれからについて聞いた。

◆災害犠牲者ゼロの地域づくり

洪水・土砂災害など、発生前に避難行動が可能な災害において、地域ごとのリスクに合わせて避難エリアを判断し、自治体の的確な意思決定を支援する「市町村災害対応統合システム（IDR4M）」の開発が進められています。私たちは、IDR4Mの全国自治体への導入に向け、地方・中都市の自治体を対象に災害時の状況把握から避難情報の発出、それを受けた住民の避難行動に至るまでの一連のオペレーションを円滑に発動できる社会システムの実装を目指しました。

研究の地として選出した栃木県栃木市は、豪雨や台風により近年２度の被害を受けた地であり、私が以前から歴史的建築物の耐震研究や歴史的町並み・集落の防災研究に携わる地でもあります。

本研究の目標は、自治体の円滑な避難オペレーションにより「犠牲者ゼロ」を実現することにありました。そこで、IDR4Mを活用した自治体での初動対応体制の検証と並行して、地域コミュニティ単位で導入しやすい価格の、河川や避難路の様子を確認できるカメラを設置し地域のリアルタイム情報を確認できるシステムを開発しました。

また、自治体や自治会のリスクコミュニケーションプロセスの確立にも重きを置き、ワークショップやアンケートを通して地域特性に合わせた避難促進策を提案しました。自治体では水害時の避難と要支援者の支援方法について、リーフレットや説明会、研修会を通じて実効性のあるものに落とし込みました。住民の避難行動に重点を置いた理由として、優れたシステムがあっても住民が行動しなければ地域の災害予防力は向上しない、という考えがあったからです。

◆一体で取り組む地域防災

行政や住民などそれぞれの立場において、災害に対する意識改革の地盤固めができたのはひとつの成果です。防災に関心を持ち主体的に動ける人がいる地域は、とても結束力が高く災害時にも有効に機能します。

地域の防災力を高めるためには、さまざまなプロセスの構築が必要です。防災の研究者として、地域の課題解決に向けて継続してサポートすることが使命だと感じています。

栃木市で２年間実証研究　自治会ではワークショップも重ねた

生成系AIの自律的な活用を

学長　佐藤 圭一

生成系AI（以下、AI）に対して社会的関心が高まっており、教育現場での対応についても議論が始まっています。

対話型のAIは、その特性から質問に対して取りあえずは何らかの回答を返してきますが、インターネット空間から収集された情報の精度が回答の質を左右します。偏見やバイアスが多い事象についての質問では、自ずと「中立性」や「客観性」「公平性」に問題が生じることになります。

卒論やレポート作成時にAIを安易に使用することは、知的活動には不可欠な深く考える機会、論点整理や分析する能力の開発が阻害されるばかりか、仮に作家や学者の文章や学説等が入り込んでいれば「剽窃（＝盗用、無断引用）」や「著作権侵害」として、また個人情報や機密情報がある場合には「違法行為」と見なされる可能性があります。さらには、皆さんが入力した自身の個人情報などがAIに取り込まれ、他人の回答に使用される恐れも生じます。

今後ますます高度化するAIの特徴をよく理解し、情報の成否を判断できる自律的な活用法を修得することが重要です。

大学とは「独善・偏見を排し、真理を探究する場」です。主体的そして創造的営みこそが大学生本来のあるべき姿です。AIをどのように使用すべきかを熟考し、学生生活に有益に活用されることを求めます。

４年ぶり防災訓練

震度５強、火災も想定

本学は防災避難訓練を４年ぶりに世田谷・町田キャンパス、ゲストハウスでそれぞれ実施した。

世田谷キャンパスでは５月25日に学生・教職員ら約2500人が参加。訓練は、11時30分に震度５強の地震が首都圏を襲ったという想定で開始され、授業中の学生は、揺れが収まった後、教職員の誘導でグラウンドに避難した。

避難後は、世田谷消防団に所属する本学学生５人による初期消火指導が実施され、訓練用の消火器や屋内消火栓を使用して模擬消火した。

講評では、本学統括防火・防災管理者の山根潤法人事務局長が「常に災害に備えることが大事。まだ安否確認システムに登録していない学生は登録し、登録を済ませている学生も使い方を確認してほしい」と呼びかけた。

世田谷消防署の岩井真理予防課長は「地震などの災害が起こった時、大事なのは命。身の安全を第一に行動してほしい。また、備蓄品が使用できるかを確認しておいてほしい」と、日ごろの備えの重要性について述べた。

世田谷消防団に所属の本学学生らによる初期消火指導。右は本学初となる女性団員の岩崎優桜さん（法１）

父母懇談会 地方でも開催

防災リーダー養成など説明

本学は、令和５年度父母懇談会を７月９日までに世田谷・町田・多摩の各キャンパスと地方会場として青森市、福島市でそれぞれ開催し、合わせて約1000人の父母が参加した。

父母懇談会は父母と教職員が直接コミュニケーションを図ることで、本学の教育活動の理解を深めてもらい、修学状況や就職活動などについて意見交換することを目的に毎年各キャンパスおよび複数の地方会場で実施している。

世田谷キャンパスでは、５月21日に、政経・理工・法・文・経営の各学部の２・３年生の父母を対象に開催し、約600人が来校した＝写真。

全体会で佐藤圭一学長が、創立106年を迎える本学の歴史や建学の精神を説明したほか、本学が注力する防災リーダー養成の取り組みなど、本学の教育活動について紹介した。

その後、国士舘大学教育後援会の山田慎吾会長が、後援会の趣旨や制度を、石見豊キャリア形成支援センター長が本学の就職状況や支援体制について説明した。

全体会終了後は各学部に分かれて学部懇談会と希望者への個別面談が行われたほか、キャンパス内の施設を見学する姿が見られるなど賑わいを見せていた。

災害レジリエンス　人材育成が肝

◆防災を謳う本学の役割

防災は極めて学際的な性質をもっています。人命救助、生活再建、コミュニティ維持のための文化を守ることなど、予防も含めすべての時間軸にわたるものであり、それら学問分野が揃っているのが総合大学である本学の強みであり役割だと考えます。

また、私はゼミ生に実地研究を推奨しており、外部から要請を受けた調査にも積極的な参加を促しています。大学時代の多様な経験が、率先して人を助ける行動や勇気、研究への動機付けにつながります。「誠意・勤労・見識・気魄」のもと防災を学ぶ国士舘。災害レジリエンスを高めるための肝となる人材が本学から全国へと活躍の場を広げることを期待します。

救急救命士会フォーラム

体育学部スポーツ医科学科の在学生と卒業生のより強固なネットワーク構築を目的としたフォーラムを開催します。

日　時：令和５年10月７日（土）10時～16時
場　所：多摩キャンパス25号館臨床実習室
テーマ：スポーツ医科学科が輩出する救急救命士の将来像
対象者：本学教職員・在学生・卒業生、一般
方　法：対面、リアルタイムWEB、オンデマンド配信（一部）
定　員：対面約300人、リアルタイムWEB約500人
主　催：本学体育・スポーツ科学学会、体育学部スポーツ医科学科
協　力：大学院救急システム研究科
参加費：無料
詳細はこちら↓

理工学部創設60周年

講演会や記念誌発行を予定

理工学部は今年、創設60周年を迎えた。昭和38年４月、本学３番目の学部として創設の「工学部」には、機械・電気・土木・建築の４学科を設けた。以来、科学技術の発展や社会の変化に応じつつ最先端の教育研究を行い、有能な技術者育成に努めた。平成19年４月には、理工学部に改組して「１学科６学系」の教育システムとし、各専門分野の拡大・連携を図るなど時代のニーズに応える改革を重ねた。

デジタル人材育成を急務とする社会的要請の中で、新たな価値創出の中核を担う学部としてますます期待が高まっている。

記念事業として、講演会・懇談会の開催と60周年記念誌の発行を予定している。

中・高は100周年

国士舘中学校・高等学校は、大正12年の「中等部」創設から今年で100周年を迎えた。大正14年４月設置の国士舘中学校は、本学初の法令に基づく教育機関で、以後、世田谷地域に根差した私学として発展した。戦禍での校舎焼失や戦後の新教育制度への対応、また新校舎完成と男女共学化などを経ながらも、一貫して心身の育成と人間性の涵養を重視する教育で社会の要請に応えてきた。

高等学校では、難関大進学を目指すクラスを設置する一方、全日制と定時制の各課程で国士舘大学への内部進学の強化を図るなど、多様なニーズに対応している。

記念事業として、秋楓祭開催中の11月３日には、卒業生や退職教員らを招いた記念イベントを実施する予定。

国士舘の今　㊱キッチンカー登場

お昼時になると各キャンパスにキッチンカーが現れる。学食の混雑緩和のため、今年４月から導入された。香りに誘われた多くの学生・教職員が列を作り、午前中頑張った自分へのご褒美といいながら、日ごとに変わるキッチンカーのメニューを楽しんでいる。

この日はラーメン専門店。すでに学食で昼食を済ませ、２度目の昼食としてラーメンを注文する学生も。「周りが食べているから釣られて食べたくなった。ちょっと食べすぎかな」と苦笑いを浮かべながらも、美味しそうにラーメンを頬張っていた。（令和５年６月撮影、世田谷キャンパス）

大学院生の奨学制度新設

１年次から適用

本学は、大学院生向けに令和５年度から奨学制度「研究スタートアップ支援奨学生」と「研究推進支援奨学生」を新設した。

研究スタートアップ支援奨学生は、本学修士課程に入学した１年生（外国人留学生を除く）の中から、入学試験の成績などが特に優秀な者を各研究科が推薦し、決定される。支給額は年額24万円。

研究推進支援奨学生は、本学博士課程に在学する者とし、１年生は入学試験の成績など、１年以上継続して在学する者（高学年生を除く）は学業成績などが特に優秀な者を各研究科から推薦し、決定される。支給額は年額30万円。

今回の奨学制度は、修士・博士課程とも１年次から適用される本学独自の奨学制度がなかったことへの対応として設けられたもので、進学や研究活動に専念するための後押しになることが期待される。

入構制限を３年ぶり解除

本学は、新型コロナウイルス感染拡大防止策として令和２年４月８日から実施していた各キャンパスの入構制限を５月10日に解除した。

新型コロナウイルスの位置付けが同８日から「５類感染症」に移行したことを受けたもの。６月１日からは図書館や国士舘史資料室の展示室・閲覧室の学外者利用も再開し、地域住民も行き交うコロナ禍前のキャンパスが戻ってきた。

学園閉鎖のお知らせ

本学は法律に基づく省エネルギー対策の一環として次の期間中、学園を閉鎖します。この間に管理者・許可者以外は入構できません。

■世田谷（中学・高校区域含む）・町田・多摩キャンパス：８月10日～17日

卒業生の皆様へ

いつも国士館大学新聞をご愛読いただき、ありがとうございます。

発送停止やご住所の変更は下記までご連絡くださいますようお願いします。

同窓会事務局
TEL：03-3413-7303
［平日 9:00 ～ 17:00］

国士館大学

国士館大学新聞はウェブサイトでもご覧になれます

www.kokushikan.ac.jp/information/public_relations/news_paper/

年４回・25日発行（１・４・７・10月）

今号の紙面

▼多摩丘陵病院と施設間連携　病院実習充実に期待……【２面】
▼「災害とドローン」今年度から開講　ライセンス取得目指す……【４面】
▼就職活動に向け３年生も準備開始……【５面】
▼全日本学生柔道優勝大会　男子16年ぶり日本一……【６面】

世田谷キャンパス
7.30 (SUN)　8.5 (SAT)　8.27 (SUN)　9.10 (SUN)　9.16 (SAT)
町田キャンパス / 多摩キャンパス
8.26 (SAT)　9.9 (SAT)
オンライン
12.9 (SAT)
日程により実施するイベント内容が異なります。詳細は「国士舘大学ホームページ」をご確認ください。

事前申込制
国士館大学ホームページからお申し込みください。
事前申し込みはこちら ▶

夢をあきらめない
国士舘大学
〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1 TEL: 03-5481-3211（入試部）
E-mail: ad1@kokushikan.ac.jp　https://www.kokushikan.ac.jp

令和6年度（2024年度）入学者選抜要項概要
※詳しくは、「令和６年度（2024年度）入学者選抜要項」で必ずご確認ください。

	AO選抜Ⅰ期	一般公募制推薦選抜
インターネット出願期間	９月30日㈯～10月６日㈮	11月１日㈬～11月８日㈬
実施学部	全学部	政経学部、理工学部、法学部、文学部、21世紀アジア学部、経営学部
試験日	10月24日㈫	11月21日㈫
合格発表日	11月１日㈬	12月１日㈮
入学手続日	１次手続締切日：11月15日㈬ ２次手続完了日：３月１日㈮	１次手続締切日：12月15日㈮ ２次手続完了日：３月１日㈮
選抜内容	小論文（600字）　100点／60分 面接 （政経学部・理工学部を除く学部）　100点 口頭試問 （政経学部・理工学部（面接を含む））　100点 書類審査 （調査書、出願基準証明書、学修計画書）　100点	小論文（600字）　100点／60分 面接 （理工学部を除く学部）　100点 口頭試問 （理工学部（面接を含む））　100点 書類審査 （調査書、推薦書、学修計画書）　100点

※AO選抜Ⅱ・Ⅲ期の実施学部・選抜日程等は、本学のホームページもしくは「令和6年度（2024年度）入学者選抜要項（7月下旬公表予定）」でご確認ください。

◆https://www.kokushikan.ac.jp/admission/

病院実習の充実 期待

連携施設 多摩丘陵病院が新装

本学と連携協定を結ぶ多摩丘陵病院（医療法人社団幸隆会＝町田市）がこのほど新装され、リハビリ病棟以外の病院機能が200㍍南に全面移転した。

同病院と本学とは、令和元年締結の「メディカルサポートに関する協定」に続き、翌2年に「施設間連携協定」を締結。本学は新築・移転に係る事業費の一部を出資し、学生・教職員の診療やクラブ活動で発生する傷病者のメディカルサポート、本学卒業生の雇用による救急救命士の活用などについて連携を図ってきた。

コロナ禍においては本協定に基づき本学学生の数百件に上る発熱診療やPCR検査の実施、新型コロナワクチン大学拠点接種で全面的な協力を得ている。

また、これまで大学院救急システム研究科における病院演習や、病院内勤務の救急救命士を志望する体育学部スポーツ医科学科の学生の科目履修の演習に活用している。

救急救命士の養成課程においては、指定三次救急救命センターあるいは指定二次救急医療機関での160時間以上の病院実習を必修とする。付属医療機関を有さない本学は当病院との協定により、安定的な実習機会の確保と学生・教職員の安心安全な修学、教育事業に寄与することが期待される。

多摩丘陵病院は従来の地で継続運営される多摩丘陵リハビリテーション病院と合わせて東京都の指定二次救急医療機関として300床を超える病床を有する総合病院。5月に新装開院し、正面入口と救急外来入口には連携協定の証として「国士舘大学連携教育施設」の看板が掲示されている。

病院正面入口に掲げられている看板

大講堂開放 地域に拡大

見学ツアー20人 学生がガイド

国士舘史資料室は国士舘大講堂見学ツアーを6月17日に開催し、学外から約20人の参加者が世田谷キャンパスを訪れた。

見学ツアーでは、学生ガイドを務めた文学部3年の鈴木怜亜さんと馬場英梨香さんが、創建104年を経た大講堂の歴史や文化財としての意義、創立者柴田德次郎などについて説明した。平成29年に国登録有形文化財（建造物）となった大講堂は、関東大震災・東京空襲・東日本大震災など多くの危機を乗り越えた、東京都で最も古い講堂であることを紹介した。

参加者は「中央に柱がないと時が経つにつれてくぼんでいくが、国士舘大講堂は中央の空間にこだわり建設されたのが見受けられ、現在まで保っていることに感銘を受けた」などと話し、歴史ある大講堂に関心を持つ参加者が多くみられた。

本企画は、5月9日の入構制限解除を受け、大講堂の定期開放を地域にも広げ、多くの方が文化財に親しむ機会として開催された。

折上格天井（ごうてんじょう）について説明を聞く参加者

大澤理事長が再任

学校法人国士舘は6月1日開催の理事会で5月31日に任期満了となった理事・監事・評議員の選任を行い、当該理事・監事・評議員の再任を決定した。

理事長には大澤英雄が再任（6期目）された。任期は令和5年6月1日から同8年5月31日までの3年間。

212校の教員参加

入試相談会

本学は、高等学校教員対象の入試相談会を5月12日、世田谷キャンパスメイプルセンチュリーホール3階アリーナで開催し、1都3県を中心に茨城・栃木・群馬・静岡・山梨の高等学校212校の教員が参加した。会場では各学部の担当教職員がそれぞれのブースで個別相談に応じた＝写真。

当日は、国士舘大講堂をはじめとした各施設を開放し、教員らは見学を通して本学の歴史や修学環境を体感する様子がみられた。

奥深山名誉教授 逝去

本学名誉教授の奥深山親司（おくみやま・ちかじ＝日本政治史）氏が、4月10日に逝去された。83歳。

奥深山氏は昭和40年国士舘大学政経学部卒業、同42年同大学院政治学研究科修士課程修了、同45年同博士課程単位取得満期退学。昭和45年本学に入職し政経学部二部講師、同62年同教授、平成15年政経学部教授。平成7年学校法人国士舘評議員。同22年定年退職、同年本学名誉教授。

政経学部二部学部長、大学院政治学研究科委員長などを歴任。大学行政に深く携わり、教育事業の進展に貢献した。

名誉教授記 6人に授与

在職中、長年にわたり本学の教育、学術、文化の発展に顕著な功績を挙げた6人に、本学は6月21日付で名誉教授の称号を授与した。授与式は6月21日、国士舘大講堂で執り行われ、佐藤圭一学長が一人一人に名誉教授記を手渡し、祝辞を贈った。

名誉教授記を手にする前列左から森脇氏、内藤氏、村岡氏、（佐藤学長）、勝田氏、鷲野氏、邢氏（代理出席）

◇**森脇　保彦**（もりわき・やすひこ＝柔道）昭和50年国士舘大学体育学部卒業。同年体育学部助手、平成14年同教授。学生主任、武道学科主任などの要職を務め、武道教育の充実、発展に寄与した。柔道部部長として数々の有力選手を輩出した。在職48年。

◇**内藤　祐子**（ないとう・ゆうこ＝微生物学、スポーツ科学）昭和52年共立薬科大学薬学部卒業。同61年歯学博士（東京歯科大学）。平成6年体育学部助教授、同18年同教授。教務主任、生涯学習センター副センター長などを歴任。専門の口腔細菌の分野で企業と共同開発を進めるなど研究で成果を残した。在職29年。

◇**村岡　幸彦**（むらおか・ゆきひこ＝外科学）昭和54年東京医科歯科大学医学部卒業。平成15年博士（医学）（東京医科歯科大学）。平成13年体育学部教授。体育学部長、副学長、学校法人国士舘理事、同評議員などの要職を歴任。体育学部教育および大学教育の充実、発展に寄与した。在職22年3カ月。

◇**勝田　政治**（かつた・まさはる＝日本近代史）昭和60年早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。平成15年博士（文学）（早稲田大学）。平成7年教養部助教授、同8年文学部助教授、同13年同教授。大学院人文科学研究科長などを歴任。明治維新史研究の第一人者として著書・論文などを多数執筆した。在職28年。

◇**鷲野　正明**（わしの・まさあき＝中国古典文学）昭和52年大東文化大学文学部卒業。同58年文学部講師、平成8年同教授。教務主任、大学院人文科学研究科長などを歴任。漢詩の研究と制作指導に注力し、著書・論文などを多数執筆したほか、学生の学術交流を通じて日中友好に寄与した。在職40年。

◇**邢　志強**（けい・しきょう＝日本語文法論）昭和52年大連外国語学院日本語学部卒業。平成14年21世紀アジア学部教授。21世紀アジア学部設置とともに本学に着任し、海外研修や交換留学の制度構築など本学の国際交流事業に多大な貢献をした。在職20年11カ月。令和5年2月逝去された。

「十分な修学支援を継続」

教育後援会 総会を開催

国士舘大学教育後援会は、令和5年度総会を7月1日、世田谷キャンパスのメイプルセンチュリーホール1階大教室で開催し、約70人の父母らが出席した。

まず、当会名誉会長の大澤英雄理事長、来賓の佐藤圭一学長がそれぞれあいさつで日ごろの支援への謝意を表し、保護者との連携による、より良い教育環境構築への理解と支援を求めた。山田愼吾会長は「十全な修学支援を継続する」と述べ、父母らに協力を呼びかけた。

議事は、令和4年度の事業報告と決算報告、同5年度の事業計画と予算計画などをそれぞれ幹事が説明し、すべて承認された。

続いて、キャリア支援課職員が本学の就職状況と各種取り組みを説明。全3年生への筆記試験対策本の配付と対策講座の実施に対する当会の支援に対し謝意を述べた。

令和４年度決算の概要

（財務部）

令和4年度決算は、令和5年5月24日開催の理事会において承認されました。以下に掲げる決算の概要は、学校会計基準に基づき作成した令和4年度事業活動収支計算書における収入・支出及び貸借対照表における令和5年3月31日現在に保有する資産、負債並びに純資産の当年度決算額（対前年度増減比）の状況について説明したものです。

なお金額は、100万円未満を切り捨てて表示しています。

●事業活動収支計算書

事業活動収支計算書は、教育研究活動に関する収支、教育研究活動以外の経常的な（主に財務的な）収支、当年度に一時的に発生した特別収支というように活動区分ごとに収支を設け、その内容と均衡状態を明らかにし、経営状況を表すものです。また本年度取得した資産を将来へ保持し継続するために各収支差額の合計額から基本金を組み入れ、組み入れ後の収支の均衡状態を当年度収支差額として明らかにしています。

1.教育活動収支

収入では、全体の8割を占める学生生徒等納付金が158億2千7百万円となり、大学生の中途退学者の減少による納付金の増加、高等学校・中学校の過去の授業料増額改定などにより、前年度に対して、1億2千2百万円の収入が増加しました。経常費等補助金は、国及び東京都から合計で20億2千7百万円の交付を受けました。その内、「高等教育の修学支援新制度」による授業料等減免費交付金収入では、減免対象者（実人数）が前年度903人から208人増加して1,111人となり、6億6千2百万円を計上しています。その他の収入では、入学検定料を主とした手数料で3億7千2百万円、現物寄付を含む寄付金で8千8百万円、付随事業収入では、学生寮の運営に伴う補助活動収入に1億1千6百万円、防災・救急救助総合研究所やウエルネス・リサーチセンターによる受託事業及び理工学部他教員が獲得した学外諸機関からの受託事業収入に1億6千3百万円、地域連携・社会貢献推進センターが行う地域交流に向けた公開講座収入では、1千1百万円、雑収入では、退職金支出に相応した退職金財団等交付金ほかで8億2千5百万円となりました。この結果、教育活動収入合計では、194億3千3百万円となりました。

支出では、人件費で教職員給与等に82億4千7百万円、役員報酬、年金及び退職金に3億7千6百万円、将来の退職金支払いに備えた退職給与引当金繰入額に5億3千4百万円、また簡易的業務支援に係る学生アルバイト等賃金に4千8百万円を計上した結果、人件費合計では、92億7百万円となりました。

次に教育研究経費では、昨今のエネルギー価格高騰による光熱水費の増額、「高等教育の修学支援新制度」利用者増加による奨学費の増額、行動制限の緩和による出張や学外実習等の増加による旅費交通費の増額、インフレの影響による業務委託費の増額などの影響により、当年度の減価償却額（建物・構築物・教育研究用機器備品等資産の購入費用を使用可能期間に応じて分割し費用化した）16億6千8百万円と合わせて、教育研究経費合計では対前年度比6億8百万円増の72億4百万円となりました。

管理経費では、主として学園広報及び学生・生徒の募集事業等に要した経費と減価償却額を計上しており、管理経費合計で12億7千4百万円となりました。

徴収不能額等では、当期において未収となった退学者及び除籍者の学生生徒等納付金に対する合計額で、5千4百万円となりました。これらにより教育活動支出合計は、177億4千万円を計上しました。

以上の結果、教育活動収入合計額から教育活動支出合計額を差し引いた教育活動収支差額は、16億9千2百万円の収入超過となりました。

2.教育活動外収支

教育活動外収支では、保有する有価証券等の受取利息・配当金などで1億1千2百万円の収入を計上し、建物等建設資金に要した借入金等利息に2千万円の支出を計上した結果、収支差額では9千1百万円の収入超過となりました。

3.特別収支

特別収支では、資産売却差額、施設設備の整備を使途指定とする寄付金、科学研究費補助金により購入した備品等の現物寄付や過年度修正額（収入）などにより、7千1百万円の収入を計上しました。一方で、物品の不用決定や図書の除籍等による資産処分差額や過年度修正額（支出）により、8千7百万円の支出を計上した結果、1千5百万円の支出超過となりました。

以上の3つの区分における収支差額を合計した基本金組入前当年度収支差額は17億6千9百万円となり、同3区分の収入の合計額である事業活動収入196億1千7百万円を分母とする事業活動収支差額比率（経営状況の健全性を示す指標）は9.02%（対前年度1.64ポイント減）となりました。

この基本金組入前当年度収支差額から本年度取得した教育研究活動に必要な資産を将来に維持確保するために基本金として9億5千9百万円を組み入れた（表示はマイナス）結果、当年度収支差額はプラス8億9百万円となり、これに前年度繰越収支差額を加えた長期の収支均衡を表す翌年度繰越収支差額は、マイナス196億8千3百万円となりました。

●貸借対照表

貸借対照表は、当年度末における資産・負債・基本金及び収支差額の残高を示し、財政状態を明らかにするとともに、教育研究に必要な資産の保有状況を表示するものです。

資産の部は、固定資産で582億5千万円となりました。有形固定資産は、土地で110億9千3百万円、建物で189億2百万円、構築物で26億7千1百万円、教育研究用機器備品及び管理用機器備品並びに図書では合計で63億3千9百万円を計上しました。

特定資産では、奨学基金の充実に向けた第3号基本金引当特定資産及び将来の退職金支払いに充てる退職給与引当特定資産並びに累積する減価償却額の一部に充てる減価償却引当特定資産の合計で33億6千9百万円を計上しました。

その他の固定資産では、多摩丘陵病院への施設利用権として10億円、残存期間が1年を超える長期保有の有価証券として146億4千3百万円のほか、合計で158億7千3百万円となりました。

流動資産では、現金預金に加えて1年以内に換金もしくは回収可能な資産として224億2千万円を計上しました。

以上の結果、資産の部は806億7千万円（対前年度1.4%増）となりました。

負債の部では、固定負債で建設資金に充てた過年度長期借入金の返済残額、また長期未払金に退職給与引当金を合わせて66億9千3百万円となりました。

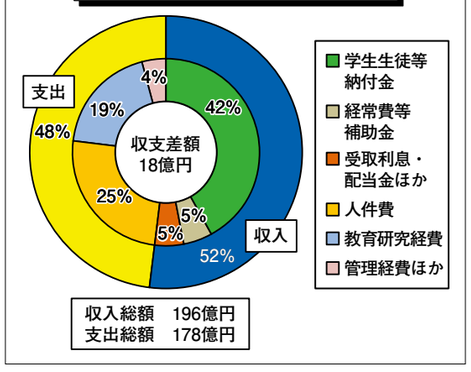
流動負債では、短期借入金（長期借入金のうち翌年度返済を予定する額）、未払金（取引業者への前年度事業経費の要支払額）、前受金（次年度事業資金となる学納金等）、預り金（3月分の社会保険料、国士舘大学教育後援会会費、寮食費、高等学校修学旅行費など）を合わせて58億5千5百万円となり、負債の部合計では125億4千8百万円（対前年度4.7%減）となりました。

純資産の部は、資産の取得を自己資本とする基本金と繰越収支差額で構成されています。基本金では、第1号基本金として、当期に自己資金で取得した固定資産の取得相当額及び過去に取得した固定資産に係る借入金の返済額並びに同未払金の支払額として9億5千5百万円を組み入れました。第3号基本金では、国士舘奨学基金として4百万円を組み入れ、第4号基本金では、恒常的に保持すべき資金として前年度同額を計上し、基本金合計では、878億5百万円（対前年度1.1%増）となりました。なお将来固定資産を取得することを目的とした第2号基本金への当年度組入額は有りません。

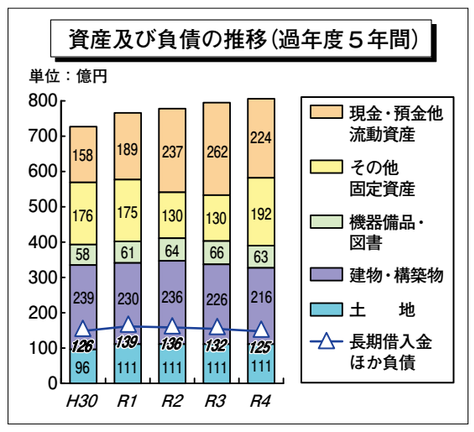
また、繰越収支差額は、事業活動収支計算書における翌年度繰越収支差額（当該年度までの収支差額の累積額）と同額で、マイナス196億8千3百万円を計上し、基本金及び繰越収支差額を合計した純資産の部は、681億2千2百万円（対前年度2.7%増）となりました。

この結果、負債及び純資産の部の合計は、資産の部と同額の806億7千万円（対前年度1.4%増）となりました。

令和４年度事業活動収支の割合



資産及び負債の推移（過年度５年間）



令和４年度 事業活動収支計算書（概略）

令和４年４月１日から令和５年３月31日まで　（単位：円）

		科目	予算	決算	差異
教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	15,840,199,000	15,827,320,060	12,878,940
		手数料	363,677,000	372,672,408	△8,995,408
		寄付金	89,287,000	88,058,990	1,228,010
		経常費等補助金	2,021,420,000	2,027,052,246	△5,632,246
		付随事業収入	275,609,000	292,808,000	△17,199,000
		雑収入	878,819,000	825,569,239	53,249,761
		教育活動収入計	19,469,011,000	19,433,480,943	35,530,057
	事業活動支出の部	人件費	9,325,256,000	9,207,417,026	117,838,974
		教育研究経費	7,720,240,000	7,204,178,402	516,061,598
		管理経費	1,356,510,000	1,274,481,191	82,028,809
		徴収不能額等	70,600,000	54,457,630	16,142,370
		教育活動支出計	18,472,606,000	17,740,534,249	732,071,751
		教育活動収支差額	996,405,000	1,692,946,694	△696,541,694
教育活動外収支	事業活動収入の部	受取利息・配当金	111,381,000	112,237,137	△856,137
		その他の教育活動外収入	0	0	0
		教育活動外収入計	111,381,000	112,237,137	△856,137
	事業活動支出の部	借入金等利息	20,732,000	20,711,486	20,514
		その他の教育活動外支出	0	0	0
		教育活動外支出計	20,732,000	20,711,486	20,514
		教育活動外収支差額	90,649,000	91,525,651	△876,651
		経常収支差額	1,087,054,000	1,784,472,345	△697,418,345
特別収支	事業活動収入の部	資産売却差額	50,000	50,000	0
		その他の特別収入	69,744,000	71,940,235	△2,196,235
		特別収入計	69,794,000	71,990,235	△2,196,235
	事業活動支出の部	資産処分差額	5,000,000	26,989,466	△21,989,466
		その他の特別支出	58,160,000	60,223,959	△2,063,959
		特別支出計	63,160,000	87,213,425	△24,053,425
		特別収支差額	6,634,000	△15,223,190	21,857,190
		基本金組入前当年度収支差額	1,093,688,000	1,769,249,155	△675,561,155
		基本金組入額合計	△1,380,355,000	△959,872,120	△420,482,880
		当年度収支差額	△286,667,000	809,377,035	△1,096,044,035
		前年度繰越収支差額	△20,492,602,262	△20,492,602,262	0
		翌年度繰越収支差額	△20,779,269,262	△19,683,225,227	△1,096,044,035

（参考）

事業活動収入計	19,650,186,000	19,617,708,315	32,477,685
事業活動支出計	18,556,498,000	17,848,459,160	708,038,840

詳細はホームページに掲載しています

令和４年度 貸借対照表

令和５年３月31日

資産の部

科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	58,250,518,885	53,284,506,472	4,966,012,413
有形固定資産	39,007,270,665	40,243,674,250	△1,236,403,585
土地	11,093,533,588	11,093,533,588	11,093,533,588
建物及び構築物	21,574,148,965	22,593,817,207	△1,019,668,242
教育研究用機器備品	1,117,825,825	1,313,693,915	△195,868,090
管理用機器備品	72,099,073	111,309,232	△39,210,159
図書	5,149,608,938	5,131,103,230	18,505,708
車両	54,276	217,078	△162,802
特定資産	3,369,330,000	2,865,330,000	504,000,000
第3号基本金引当特定資産	80,042,000	76,042,000	4,000,000
退職給与引当金特定資産	2,000,000,000	2,000,000,000	0
減価償却引当特定資産	1,289,288,000	789,288,000	500,000,000
その他の固定資産	15,873,918,220	10,175,502,222	5,698,415,998
借地権・電話加入権	216,238,540	216,238,540	0
有価証券	14,643,282,000	9,543,282,000	5,100,000,000
その他の資産	1,014,397,680	415,981,682	598,415,998
流動資産	22,420,406,361	26,241,649,210	△3,821,242,849
現金預金	20,952,959,802	24,131,392,802	△3,178,433,000
未収入金	644,273,784	876,915,782	△232,641,998
貯蔵品	73,036,441	73,184,215	△147,774
有価証券	700,000,000	1,099,950,000	△399,950,000
前払金・仮払金	48,408,722	58,783,149	△10,374,427
別段預金ほか	1,727,612	1,423,262	304,350
資産の部合計	80,670,925,246	79,526,155,682	1,144,769,564

負債の部　（単位：円）

科目	本年度末	前年度末	増減
固定負債	6,693,419,619	7,269,216,900	△575,797,281
長期借入金	1,881,582,000	2,466,872,000	△585,290,000
長期未払金	223,539,608	54,799,416	168,740,192
退職給与引当金	4,588,298,011	4,747,545,484	△159,247,473
流動負債	5,855,410,582	5,904,092,892	△48,682,310
短期借入金	585,290,000	585,290,000	0
未払金	1,319,043,503	1,258,052,658	60,990,845
前受金	3,536,377,458	3,641,900,971	△105,523,513
預り金	414,699,621	418,849,263	△4,149,642
負債の部合計	12,548,830,201	13,173,309,792	△624,479,591

純資産の部

科目	本年度末	前年度末	増減
基本金	87,805,320,272	86,845,448,152	959,872,120
第1号基本金	86,434,278,272	85,478,406,152	955,872,120
第3号基本金	80,042,000	76,042,000	4,000,000
第4号基本金	1,291,000,000	1,291,000,000	0
繰越収支差額	△19,683,225,227	△20,492,602,262	809,377,035
翌年度繰越収支差額	△19,683,225,227	△20,492,602,262	809,377,035
純資産の部合計	68,122,095,045	66,352,845,890	1,769,249,155
負債及び純資産の部合計	80,670,925,246	79,526,155,682	1,144,769,564

国士舘大学
Kokushikan

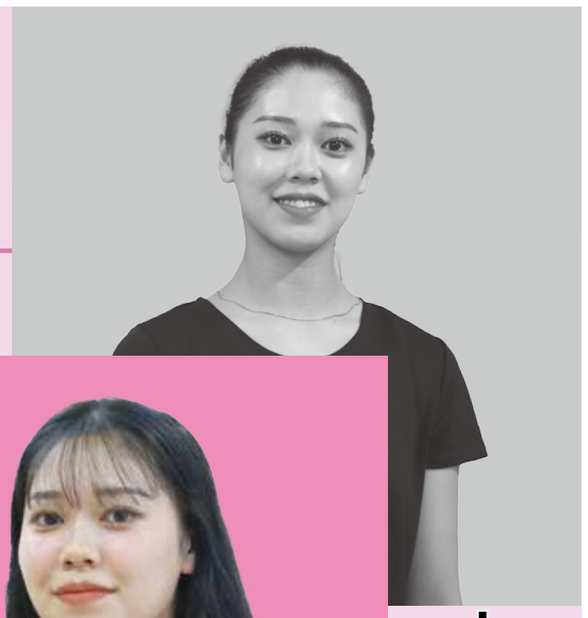
#学びも遊びも、今しかできないことを

学生生活で楽しかった思い出は？

ファッションのこだわりは？

国士舘大学に入学した理由は？

将来どんな人になりたい？



大学で成長したことは？

あなたの推しは何？

キラリ輝く、国士舘大生をご紹介

トキメキ KOKUSHI

2023年８月
プチリニューアル

フォト＆ビデオで学生をご紹介♪

国士舘大学公式 Instagram で掲載している在学生紹介コンテンツ「トキメキ KOKUSHI」。

新時代を切り拓く魅力ある学生たちをインタビュー形式で発信しています。

国士舘大学で成長したこと、学生生活での思い出など今をトキメく国士舘生を紹介しています。

国士舘大学公式 Instagram の
アカウントはこちら☞
KOKUSHIKAN_UNIVERSITY

Instagram のアカウントをお持ちでない方はトキメキ KOKUSHI 特設サイトからもご覧いただけます☞
KOKUSHIKAN_UNIVERSITY

令和５年度科学研究費助成事業採択課題一覧

62件に7488万円交付

独立行政法人日本学術振興会から、令和５年度科学研究費助成事業の研究種目別に交付決定があり、新規採択18件、継続課題44件の計62件の学術研究に合わせて7488万円の科研費が交付される。

採択された学術研究は、下表のとおり。

	研究種目	氏名	所属	職名	研究課題
新規採択	基盤研究 (B)	鈴木　佑記	政経学部	准教授	タイの「後住民」による先住民運動に関する人類学的研究
	基盤研究 (B)	位田　達哉	理工学部	准教授	被災直後に構築できる革新的な建設型応急住宅の生産システムの開発
	基盤研究 (B)	石野　裕子	文学部	准教授	記憶する都市：ヨーロッパにおける場所とモノが語る「歴史」
	基盤研究 (C)	八木　堅二	政経学部	准教授	中国語方言における音韻・文法・語彙に関する言語類型地理論的研究
	基盤研究 (C)	久保田　裕次	文学部	准教授	日清・日露戦争期日本の「南進」に関する多角的研究
	基盤研究 (C)	大澤　秀介	法学部	特任教授	統合から分断へ－共和党最高裁の成立とその将来的限界
	基盤研究 (C)	小野瀬　倫也	文学部	教授	子どものプリコンセプションから始まる学びの最適化を目指した理科授業デザインの研究
	基盤研究 (C)	松浦　孝明	文学部	准教授	障害児の眼球運動向上トレーニングの開発と運動技能向上に対する効果の検証研究
	基盤研究 (C)	清水　優菜	文学部	講師	統計不安の測定尺度開発と実態解明
	基盤研究 (C)	澤邊　正人	理工学部	教授	有限群論再生としての、群複体の幾何と表現の研究
	基盤研究 (C)	都　城治	防災・救急救助総合研究所	助教	鉄道駅で発生した心停止の発生状況と、バイスタンダーによる救命処置の実態調査
	基盤研究 (C)	竹市　勝	政経学部	教授	捕捉動作プロセスにおける運動物体の認知・予測エラーと捕捉の成否に関する研究
	基盤研究 (C)	後藤　貴浩	文学部	教授	地域におけるジュニアスポーツ指導者の生活実践分析
	基盤研究 (C)	陳　洋明	体育学部	講師	小学校体育科における投能力育成に向けた運動領域横断カリキュラムの開発
	若手研究	大柳　良介	理工学部	講師	全地球炭素循環におけるマントルの役割を流体―岩石平衡計算から解読する
	若手研究	長名　シオン	体育学部	講師	ペプチド分解酵素による筋分化制御メカニズムの解明
	若手研究	河田　浩昭	21 世紀アジア学部	講師	旅行中の計画達成と偶発的体験の観光経験評価への影響 - 事前計画とセレンディピティ -
	特別研究員奨励費	長名　シオン	体育学部	講師	ペプチド分解酵素 LAP3 に着目した骨格筋維持機構の解明
継続課題	基盤研究 (B)	乾　睦子	理工学部	教授	近代建築物を彩った日本の石：国産建築石材の標本探索と破壊・非破壊分析
	基盤研究 (B)	福永　清貴	法学部	教授	「岸清－法律事務所訴訟記録」を起点とする法の近代化と裁判の実相に関する実証的研究
	基盤研究 (B)	橋本　隆雄	理工学部	特任教授	侍の英知である城郭石垣を守る変位計測と数値解析を併用した危険度診断システムの構築
	基盤研究 (B)	羽田　克彦	体育学部	教授	細胞内カルシウム恒常性破綻によるアスリート特有の代謝障害の解明
	基盤研究 (C)	菱刈　晃夫	文学部	教授	メランヒトンにおける「自然の光」説の受容と発展に関する思想史的研究
	基盤研究 (C)	目野　由希	体育学部	教授	日本ペン倶楽部／日本ペンクラブの〈文学場〉――日本文学史と世界史の再解釈
	基盤研究 (C)	長谷川　均	文学部	教授	多チャンネル UAV 画像による生サンゴの抽出と底質区分に関する実証的研究
	基盤研究 (C)	三浦　正広	法学部	教授	著作権契約における相当報酬理論の導入可能性に関する比較法的研究
	基盤研究 (C)	本山　雅弘	法学部	教授	知的財産権と憲法上の利用者利益との比較衡量論の近時の発展と今後の展望
	基盤研究 (C)	織田　健志	政経学部	教授	戦後思想における保守主義の形成――竹山道雄と林健太郎を中心に――
	基盤研究 (C)	中岡　俊介	政経学部	教授	20 世紀前半における租税制度改革の動向とその諸背景 - 日英米の所得税制度を中心に
	基盤研究 (C)	堀口　朋亨	経営学部	教授	旧東欧社会主義諸国における同族経営の再興－正統性がもたらす権限と機能に着目して－
	基盤研究 (C)	植田　広樹	防災・救急救助総合研究所	教授	先端技術 VR による救急現場疑似体験を活用した救急救命士教育プログラムの開発
	基盤研究 (C)	堀井　宏祐	理工学部	准教授	避難誘導装置と防災センサの知能化と分散協調処理による動的避難誘導システムの構築
	基盤研究 (C)	地神　裕史	理工学部	教授	視覚・体性感覚の認知機能改善により競技力を向上させる新たなトレーニング戦略の開発
	基盤研究 (C)	田中　重陽	体育学部	教授	スポーツ競技者の筋疲労前後およびその回復過程における筋・腱の機能評価法の確立
	基盤研究 (C)	河野　寛	文学部	教授	幼少期における動脈粘弾性と体力の関係-横断的・縦断的検討-
	基盤研究 (C)	加藤　将貴	政経学部	准教授	ディープフェイクによる人の認識へのインパクト分析
	若手研究	秋葉　茂季	体育学部	准教授	スポーツカウンセリングにおいて身体を語ることの効果機序
	基盤研究 (C)	河先　俊子	21 世紀アジア学部	教授	日本大衆文化の開放が韓国の日本語教育に及ぼした影響
	基盤研究 (C)	鈴木　裕之	法学部	教授	SNS がアフリカの口頭伝承文化に与えるインパクト：マンデのグリオの事例
	基盤研究 (C)	本間　貴子	文学部	准教授	通常教育と知的障害教育の学びの連続性を実現する教科横断型キャリア教育モデルの追究
	基盤研究 (C)	名越　篤史	理工学部	准教授	固液臨界現象の探索：物理的特徴および機構の調査
	基盤研究 (C)	神野　誠	理工学部	教授	超微細低侵襲手術支援ロボットの機構およびシステムに関する研究
	基盤研究 (C)	酒井　平祐	理工学部	准教授	分子配向と結晶成長を指向した有機半導体成膜法の開発と有機トランジスタへの応用
	基盤研究 (C)	中島　剛	体育学部	准教授	大脳皮質視覚野に可塑性を促す新しい視覚機能リハビリテーション法の開発
	基盤研究 (C)	山本　里佳	体育学部	准教授	新体操ピルエット・ローテーションの回転数を規定する因子の解明
	基盤研究 (C)	熊川　大介	体育学部	教授	スピードスケート選手における「新・世界で勝つための目標体力水準」の構築
	基盤研究 (C)	和田　匡史	理工学部	教授	熱ショック蛋白質発現が COVID-19 による体力低下やストレス改善の可能性の解明
	基盤研究 (C)	粟野　直之	経営学部	講師	視線計測データと画像解析を用いた視覚認知の定性および定量分析
	基盤研究 (C)	林　一雅	法学部	准教授	学習環境における位置情報や行動情報の学習ログ収集システムの開発
	基盤研究 (C)	西村　亮彦	理工学部	准教授	道路空間の再編・利用を通じた公共空間再生のトータルデザイン
	若手研究	齊藤　紅葉	文学部	講師	幕末期における公家の失脚と政治参画動向を踏まえた明治維新の再解釈
	若手研究	郡司　菜津美	文学部	准教授	性教育における教えづらさと学びづらさを低減させる教員養成の指導プログラムの開発
	基盤研究 (C)	平　浩一	文学部	教授	新聞小説の多角的研究―1920 年代から 1940 年代を中心に
	基盤研究 (C)	小口　和美	21 世紀アジア学部	教授	前３千年紀シュメール・アッカド地方の政治と社会：出土史料の研究
	基盤研究 (C)	土佐　昌樹	21 世紀アジア学部	教授	東アジアの国民的アイデンティティ変容をめぐるマルチサイテッド・エスノグラフィー
	基盤研究 (C)	関根　明伸	体育学部	教授	韓国における道徳科教科書の内容分析研究
	若手研究	島崎　杉雄	経営学部	准教授	のれんとシナジーに関する研究
	若手研究	榎本　理恵	体育学部	講師	多変量モデルにおける変数選択問題の応用とデータへの適用
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 (A)）	鈴木　佑記	政経学部	准教授	ポスト・コロナ時代におけるタイの南海産品をめぐる管理・生産・販売実態の解明
	基盤研究 (C)	太田　麻衣子	文学部	准教授	長江流域秦楚文化の研究：漢帝国成立の文化的背景
	基盤研究 (C)	山下　修平	経営学部	准教授	戦時期日本における会計実務の植民地への展開に関する研究
	若手研究	桐越　仁美	文学部	講師	西アフリカにおけるイスラーム系移民の危機回避に関する人類学的研究

合計 62 件：新規採択 18 件、継続課題 44 件　ほか繰越（延長）課題 19 件

目指そう 国家資格 防災分野での活用に期待

ドローン操縦

機体説明を受ける学生ら

今年度から開講した「災害とドローン」の実技講習が5月27・28日、多摩南野キャンパスで行われ、全履修予定者114人のうち8人の学生が受講した。

実技講習では、本学防災・救急救助総合研究所の教員から機体の点検やバッテリー交換方法のレクチャーを受けた後、基本飛行、応用飛行、カメラ操作などを行った。付属のカメラを使用し「ドローニー」という撮影方法にも挑戦し、それぞれ迫力のある映像を撮影した。

講習を受けた学生は、「公務員を目指している。国家資格を取得し、ドローンを活用した社会貢献をしたい」「測量士補の取得に向けて勉強に励んでいる。ドローンでの測量についても学びたく受講を決めた」など、さまざまな目的を持った学生が、ライセンス資格取得に向け本講習で学びを深めた。

本科目は全学部開講の随意科目で、全3日間のカリキュラムを修了し授業内試験に合格することにより、国土交通省管理団体資格「UAS LEVEL2」ライセンスを取得することができる。この資格取得により十分な経験者とみなされ、国家資格である無人航空機操縦士に必要な講習時間が一部免除される。

近年、ドローンは急速に進化し、災害時にはドローンによる被害状況調査などが行われている。また、防災分野だけでなく、地理環境、測量、都市整備、農政、インフラ整備などのさまざまな分野で活用されており、ドローンを活用し社会貢献できる人材育成を目指す。

政経学部 3ゼミ合同 SDGsプロジェクト 「食品ロス」の課題検討

合同発表会で解決策を提案する学生ら

政経学部の佐藤恵教授・柴田怜准教授・赤石秀之講師の基礎ゼミナールに所属する2年生約50人が、6月中旬から1カ月にわたり、課題解決型授業として、SDGsプロジェクト「目指せ食品ロスゼロ！ミッションin国士舘大学」に取り組んだ。本プロジェクトは、株式会社G-Placeが開発した自治体連携型フードシェアリングサービス「タベスケ」が抱える課題の解決策を検討する共同事業。

初回には、企業の担当者から学生に向けた説明会が行われ、食品ロスの現状と「タベスケ」のサービス概要、ユーザー使用率や登録店舗からの出品の継続性といった課題が提示された。

学生は食品ロスの社会課題について学びを深めるとともに、グループに分かれて調査・分析を行い、解決策を検討した。

7月12日には、都内3自治体の担当者を招き合同発表会が行われた。

発表では「業界他社と比較してSNSフォロワーが少ない」「サービス利用の利点を実感することが重要」などの分析のもと、SNS活用による認知度の向上や協力店によるイベントの実施など、学生の視点で多様な戦略案が提案された。

発表後、企業担当者は「我々がやりたいことを具体的に示してくれた。活用できるよう会社で検討するので楽しみにしていてほしい」と本プロジェクトの成果を述べた。

「うなぎパイ」山崎社長登壇 経営ノウハウ 後輩に講義

経営学部

経営者による講演会を定期開催する経営学部の専門科目「優良中堅・中小企業講座」で6月28日、銘菓「うなぎパイ」で知られる有限会社春華堂（浜松市）の社長、山崎貴裕氏（平成10年政経学部二部卒）が登壇した＝写真。

本学の卒業生でもある山崎氏は冒頭で、学生時代から続けた人形メーカーでの修行が、家業を継ぐ形で入社した春華堂での経営の基礎になったと振り返った。

さらに経営者として、将来を見据えた商品開発による販路拡大のほか、地元観光資源と連携した事業展開により、まちの活性化につながった例など、数々の戦略と経営ビジョンについて講義した。

山崎氏は、若き経営者との交流が自社の発展のきっかけになったとし、「経営学を学び、人と社会を支える人材になってほしい」と学生にエールを送った。

高麗大学副教授が講義 歴史講演会で活発質疑

文学部

文学部史学地理学科考古・日本史学コース主催の歴史講演会が、6月30日世田谷キャンパス5号館5303教室で開催された。

はじめに本学大学院人文科学研究科修士2年の田中雄大さんによる研究報告があり、続いて「歴史教育のなかの『新安船』―沈没船から蘇る東アジア海域交流の実態―」と題して、韓国・高麗大学校副教授で国際日本文化研究センター外国人研究員の鄭淳一（ジョン・スニル、写真）氏による講演が行われた。

鄭氏は、1975年に韓国沖で発見された沈没船「新安船」を通じて、韓国における歴史教育が自国史と世界史の統合的教育の一助となるのではないかと考察。引き上げられた木簡や高麗青磁などから推測される歴史的背景を説明したほか、新安船が東福寺などの寺社復興のために運用された「寺社造営料唐船」である可能性にも触れ、日本―中国間の交流を含めた中世東アジア海域交流の重層性などについて多角的に講義した。

講義終了後は、学生のほか教員からも多くの質問が寄せられ、盛況のうちに終了した。

道路空間の活用 実験 会津若松市と協働でまちづくり

理工・西村研究室

「大町マルシェ」で道路上に設けた広場

理工学部まちづくり学系の西村亮彦研究室では、令和4年12月から福島県会津若松市とパナソニックホールディングス株式会社との協働で、道路空間を活用した地域活性化の取り組みや未来のまちのデザイン検討とその実現に向けた社会実験を企画・実施している。

昨年12月と今年3月には地域関係者や会津若松市職員と模型などを用いたワークショップを実施し、沿道の施設や駐車場、道路空間を一体的に活用した、子ども主体の道路空間の実現方策について議論を重ねた。西村研究室はワークショップで使用する模型の製作や道路空間のデザイン検討に協力し、5月5日には歩行者天国の「大町マルシェ」に合わせ学生らがDIYで設計・製作したいすやテーブルなどを用いた広場づくりを行ったほか、同12日から16日にかけて歩行者の安全を確保しながら道路を利活用するための社会実験と現地調査を実施した。西村准教授は「継続的な実験を通じて地方都市が抱えるまちの課題を道路空間から解決するモデルの構築を目指す」と話した。

中学生にも講義 高大接続行事を拡大

理工学部人間情報学系の実験室を見学する高校生

本学は、内部推薦受験を希望する国士舘高校3年生を対象とした「学部・学科見学会」を5月下旬から6月下旬にかけて全学部で実施し、内部進学を考える生徒が世田谷・町田・多摩キャンパスを訪れ、興味のある学部の学びを体験した。

各学部では、学科ごとに授業見学やゼミ体験、キャンパスツアーなどが行われ、生徒らが学びたい学部を考え、1年後の大学生活を思い描く機会とした。

また、4月には高大接続行事の一環として、21世紀アジア学部が国士舘中学校の2・3年生に向けて伝統芸能についての講義を行った。毎年中学で実施される古典芸能鑑賞の理解を深め、また町田キャンパスを知ることで進路の視野を広げることを目的に実施された。

講義の後には学食での昼食やキャンパスツアーも実施され、中学生のうちから大学の雰囲気に触れる好機となった。

授業公開でFD推進

本学はFD活動の一環として授業公開を実施している。他教員の授業実践を見学することで、教員の意識改革や授業改善を図り、教育の質向上につなげることがねらい。

今年度はアクティブ・ラーニング手法を取り入れた授業を中心に、6月12日から7月6日までの期間に全7学部および防災・救急救助総合研究所の教員13人が授業を公開した。

期間中は数多くの教職員が見学に訪れ、教員間で実践方法を共有し授業改善を図ろうと、熱心に聴講していた。

大震災時の対処を認識

世田谷プラットフォーム講演会

令和5年度世田谷プラットフォームリスクマネジメント部会の講演会が6月21日、世田谷キャンパスで開催され、協定校（国士舘・駒澤・昭和女子・成城・東京都市・東京農業）の職員約25人が参加した。当日は東北大学と会場をオンラインでつなぎ、同大学総務企画部総務課の西川雄一氏と福士邦彦氏に、大規模地震の経験から、当時の対応やその後の取り組みについて話を聞いた。

講演では、東日本大震災発生時にインフラが途絶する中で災害対策本部を設置し、安否確認、建物等の被害確認、入試や卒入学式などの学事対応、業務の再開など、さまざまな課題に直面した経験について説明があり、参加者は発災時に大学に迫られる対応について現実的な視点で認識を新たにした。

また、震災を踏まえて策定された業務継続計画（BCP）について、策定までの動きと実効性検証のためのロールプレイング型訓練の実施と成果などについて話が及ぶと、参加者は所属大学での現状と照らし合わせながら熱心に耳を傾けた。

国士舘史資料室だより ○ 50 ○

理工学部創設60年

令和5（2023）年は、国士舘にとって節目の多い年で、ちょうど10年前の本紙「節目の年から省みて」にも記したところである（『大学新聞』第493号）。主な節目を列記すれば本年は、国士舘の母体・青年大民団の結成110年、国士舘中学校・高等学校の創設100年、また戦時下における学徒出陣から80年、戦後の「至徳学園」からの復称と国士舘短期大学創設から70年、そして工学部（現理工学部）の創設60年などにあたる。これらの節目の中から、今回は工学部創設の頃を振り返っておこう。

昭和38（1963）年4月、国士舘大学創設後の3つ目の学部として「工学部」が設置された。学部設置にあたり機械工学科・電気工学科の2学科を設け、翌39年には土木工学科・建築学科を増設した。日本社会の高度経済成長を背景として、各科学技術分野で活躍できる技術者の養成を図ることが学部新設の主な目的であった。なお昭和38年度には高等学校に工業科（機械科・電気科）を新設したように、国士舘が総合学園への発展を目指す中で、理工系学部の新設は重要な意義を持つものであった。

ただし戦前からの実績を持つ早稲田大学や日本大学などのほか、昭和24年頃に相次いで新設された武蔵工業大学などの各「工業大学」と比べれば、国士舘の工学部新設は後発である。このため特に早稲田大学（以下「早大」）に協力を仰ぎ、各分野で高名な教授らを招聘した点は学部の特徴でもあった。

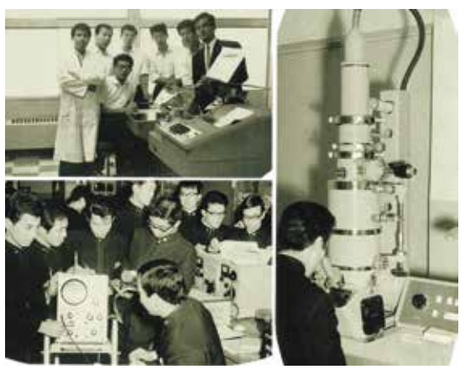
創設時の教授陣をみると、機械工学科には早大から塩沢正一（金属材料学）、東京帝国大出身で造船開発の権威・木村正彦（機械設計）らを、電気工学科には早大から帆足竹治（電気磁気学）や大隅菊次郎（電気設計）らを招聘した。また土木工学科では早大から青木楠男（土木材料学）や法政大学の江崎義人（土木施工法）らを、建築学科では早大から十代田三郎（建築材料学）や日本大学の綾井九州彦（建築設備）らを招いている（『工学部30年誌』平成5年11月）。

このうち機械工学科に招聘した木村正彦については、当時政経学部助教授で設置申請にも尽力した藤井秀夫の言として「工学部は、偏に木村教授の率いる東京帝国大学、三菱重工業のラインに繋がる先生方で成立した経緯を忘れてはならない」との回顧がある（『理工学部創設50周年記念誌』平成26年3月）。

最後に、工学部創設期のエピソードを、ひとつ挙げておこう。創設直後の昭和39年10月10日から24日の間で開催された第18回オリンピック東京大会において、本学からは主に体育学部・政経学部の学生らが会場案内などの任に従事したことがわかっている（『百年史 通史編』579頁）。このうち工学部機械工学科の2年生であった清水將任は、通訳ボランティアとして派遣された。昭和39年10月13日付の『会報』には「オリンピック期間中アメリカサービス機関の通訳として出場することを認める」と記されており、清水は東京五輪に通訳として活躍したことがわかる。

理工学部の発展には施設・設備面の充実も大きいが、次の機会に譲ろう。

（国士舘史資料室　熊本　好宏）



第１期卒業アルバムより電子顕微鏡（右）
電子計算機（左上）パルス波（左下）

マスコミを追う

【新聞】

●環太平洋経済連携協定（TPP）への英国の新規加入が承認されたことについて、政経学部の助川成也教授のコメントが掲載（読売新聞7月17日）

●疲弊する教員㊤「隠れ残業・休みは月2日」において体育学部の喜名朝博教授のコメントが掲載（読売新聞5月5日）

●外国人労働者の技能実習制度見直しについて、文学部の鈴木江理子教授のコメントが掲載（毎日新聞5月3日）

●オピニオン「有事想定の国民保護」において、防災・救急救助総合研究所の中林啓修准教授のインタビューが掲載（朝日新聞4月13日）

【テレビ】

●「ミライの歩き方」で法学部の藤巻梓教授が相続登記の義務化について解説（テレビ東京6月7・14日）

●「報道ライブ インサイドOUT」に、体育学部の須藤明治教授が出演し、大腸がんのリスク軽減策について解説（BS11　5月3日）

【雑誌】

●『学問と政治～新しい開国』進取 安全保障編【第8回】」において、文学部の石野裕子准教授が「フィンランドから見たウクライナ戦争」として寄稿（中央公論7月号）

著書紹介

コミュニティのかたちと復興区画整理
大槌町町方・吉里吉里の地域デザイン
共著　二井昭佳（理工学部教授）
発行　鹿島出版会
価格　3850円（税込）

記憶された人と歴史
中国福建・江西・浙江の古墓・史跡調査記
共著　小川快之（文学部教授）
発行　デザインエッグ社
価格　3722円（税込）

これだけは知っておきたい
橋梁メンテナンスのための構造工学入門（実践編）
共著　津野和宏（理工学部教授）
発行　建設図書
価格　3630円（税込）

Before／After
民法・不動産登記法改正
共著　藤巻梓（法学部教授）
発行　弘文堂
価格　2530円（税込）

就活支援　３年生も準備開始

インターンシップに備え

コミュニケーション・マナー講座

ペアワークを交えながらマナーとコミュニケーションを学ぶ

本学キャリア形成支援センターは3年生・修士1年生を対象に、ガイダンスや各種対策講座を開講し、就職活動に向けた支援を開始している。

6月24日には、コミュニケーション・マナー講座が34号館B301教室で開催され、本学主催のインターンシップに参加する学生ら約140人が参加した。

講師には、株式会社エイチアールピーの山口みほ氏を招き、ビジネスマナーの体得と、ビジネスコミュニケーション力の向上を目的に講座が行われた。

はじめに山口氏は、マナーを良くする5大要素、身だしなみ・表情・あいさつ・立ち居振る舞い・言葉遣いについて解説。学生はそれぞれペアになり、表情や姿勢などをチェックし合いながらビジネスマナーを学び、インターンシップまでに改善すべき点を共有した。

続いて、コミュニケーションとして、名刺交換や電話応対、仕事の進め方について話があり、学生は実践を交えながらも、熱心にメモをとるなどして聴講した。

山口氏は「皆さんの中には成長の芽がたくさんあるが、育てられるのは自分しかいない。本講座が自身の可能性を引き出す一助になってくれるとうれしい」と学生にエールを送った。

学生は、「今回学んだことと自分の長所を組み合わせ、インターンシップ期間中の行動につなげたい」と話し、夏季休業期間中に実施するインターンシップに向けて意気込みを語った。

法学部　就職支援を拡充

２年生対象の講座も開講

夢に向かった学びをサポートするため、刑事系・民事系・公法・総合法学の4コースを選択できる法学部では、それぞれの進路に向けて学部独自の支援体制を整えている。

警察官を志望する学生向けには、警察官採用試験対策を手がける株式会社日本公法から講師を招き、模擬面接と面接指導講座を行っている。5月20日に行われた講座では、受講学生らが入室時のお辞儀の角度や声の大きさ、座る際の作法など講師から指導を受け、実際の面接同様の緊張感を持って取り組んでいた。

面接時の作法について指導を受ける学生

本学法学部を卒業し、各方面で活躍する卒業生を講師として招き、「生の声」を聴くキャリア講座も行われている。4月14日に開催された第1回では弁護士の宗像玲樹氏（平成18年卒）が登壇し、過去の自身の話も交えながら弁護士の仕事について講演した。

さらに今年度からは、2年生を対象に公務員試験対策入門講座が開講され、公務員を目指す学生に向けた試験対策を行うほか、秋期からは民間企業を目指す学生に向けたSPI講座や自己分析、グループワーク等を行うキャリア支援プログラムが開講予定で、より就職支援に力を入れていく。

地域連携で美化活動

ルール・マナーキャンペーン

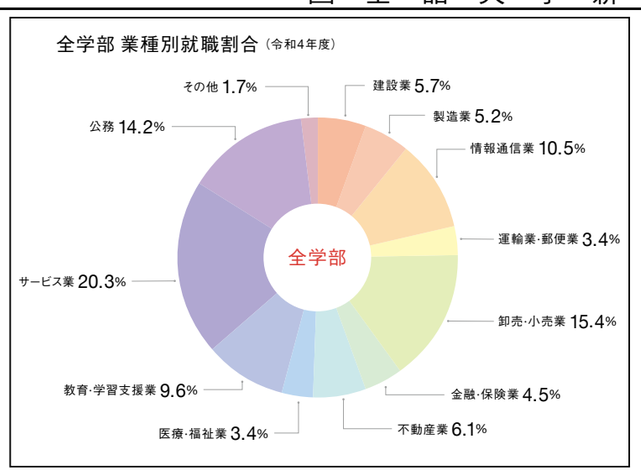
春期ルール・マナーキャンペーンが5月10日から計4回、毎週水曜日に世田谷キャンパスで実施され、学生77人、教職員77人、地域住民21人の、合わせて175人が参加した。

昼休みの時間に集まった学生と教職員、梅丘1丁目町会、同2・3丁目町会の住民らは、佐藤圭一学長からの激励を受けた後、複数のグループに分かれ大学周辺を歩きながら、落ちているごみを拾い集めた。

ルール・マナーキャンペーンは学生のマナー向上を目的に春と秋に2回実施している。学生や教職員だけでなく近隣住民も一緒になり、大学周辺の喫煙や駐輪マナーなどの注意喚起をしながら、街の美化活動に取り組んでいる。

就職率回復　96・7％

令和4年度卒業生



全学部の業種別内訳（ホームページでも公開中）

令和4年度（5月1日現在）の本学学部卒業生の就職率は96・7％（前年度比2・8ポイント増）で、前年を上回り、ほぼコロナ禍前の水準に戻った。感染状況が落ち着き各企業の採用意欲が高まったと見られる。業種別就職割合では、割合が高い順にサービス業20・3％、卸売・小売業15・4％、公務14・2％、情報通信業が10・5％となった。情報通信業の割合は約2ポイント高まるなど需要の高さを示している。

本学が強みとする公務員および教員には合計486人が就職。全体の2割を占めるなど、依然として高い水準を維持した。

本学では、キャリア形成支援センターを中心に全学的な支援体制を整えている。さらに、各学部が専門分野に特化した独自のサポートを展開するなど、学生一人一人の夢の実現に向け支援している。

消防官就職者数　11年連続全国1位

国家試験合格率は98％

4月に発売された『大学ランキング2024』（朝日新聞出版）の調べによると、本学の令和3年度卒業生の消防官への就職者数が11年連続1位となったことが分かった。警察官は2位、自衛官は5位となった。

また、3月に行われた第46回救急救命士国家試験では、体育学部スポーツ医科学科の学生139人（既卒5人含む）が合格した。令和4年度卒業生の合格率は98％で平成16年以来、全国の四年制大学の中で1位を堅持している。

痴漢撲滅を啓発

国際ボランティア部が協力

6月13日に東京・世田谷区のキャロットタワー1階プラザ広場（三軒茶屋駅前）で実施された「痴漢撲滅キャンペーン」に本学国際ボランティア部が協力した＝写真。

本キャンペーンは、世田谷警察署の痴漢抑止のための啓発活動として、東急電鉄世田谷線、本学国際ボランティア部、世田谷区防犯協会などが協力し、同部の藪下輝紘さん（法4年）と滝澤広大さん（21ア3年）の2人が参加した。当日は、チラシやウェットティッシュを配付しながら、危険な状況を回避するための予防策や注意喚起を行い、痴漢を見逃さず傍観者とならないよう呼びかけた。

オープンキャンパス開催　2300人真剣に

本学は6月以降、土日を利用して世田谷・町田・多摩の各キャンパスでオープンキャンパスを開催している。6月10日には町田・多摩キャンパス、同11日には世田谷キャンパスで開催し、本学へ入学を希望する受験生など約2300人が来場した。

当日は、大学紹介・入試概要説明のほか、在学生によるキャンパス見学ツアーや個別相談などさまざまなプログラムを通して本学の魅力を伝えた。

多摩キャンパスでは、体育学部スポーツ医科学科による救急処置実習のデモンストレーションが行われ、就職者数全国1位を誇る救急救命士養成課程の学生の動きを、入学を志望する受験生が真剣な眼差しで見学していた＝写真。

12月にはオンライン形式での開催も予定している。

学園祭に行こう

今年も各キャンパスで学園祭が開催されます。是非お立ち寄りください。

◆鶴川祭（町田キャンパス）：10月14・15日
◆楓門祭（世田谷キャンパス）：11月2・3日
◆多摩祭（多摩キャンパス）：11月11・12日

詳細はこちら↓

在外研究リポート

スイス

体育学部教授　田原　淳子

4月からスイス・ローザンヌの国際オリンピック委員会オリンピック研究センターを拠点に研究を進める体育学部・田原淳子教授（近代オリンピック史）からの現地リポートをお伝えします。

オリンピックハウスの表彰式会場で。左からツヴァイフェル氏、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会事務局長のエルヴィラ・ラミニ氏、田原教授

令和5年4月から半年間、学外派遣研究員としてスイスのローザンヌに滞在している。スイスの西南に位置するフランス語圏にあり、レマン湖沿いの美しい街である。天気のいい日には対岸にヨーロッパアルプスの最高峰モンブランが見える。

筆者は近代オリンピックの歴史において理念と現実がどのように対峙してきたのかを検討してきた。オリンピックの目的はスポーツを通して人類に貢献することである。そのための二つの柱「人間形成と世界平和」のうち後者に着目して、日本がオリンピックを通して国際社会に与えてきたインパクトについて明らかにしたいと考えた。

研究の拠点にしている国際オリンピック委員会（IOC）オリンピック研究センターには、IOC創設以来の膨大な文書類（議事録、書簡、新聞の切抜き等）が緻密に整理・保管されている。世界中から集められた図書や報告書類、デジタルデータも豊富にある。ここにいると、いくらでも研究のアイデアが浮かび、研究し続けられるような気がする。

出会いもある。たまたま居合わせた研究者と雑談を交わす中で、研究上のヒントを得たり、重要な論文や研究者の紹介を受けることもある。

初めてローザンヌを訪れたのは大学院生のときだった。招致に成功した1940（昭和15）年の東京オリンピックはなぜ返上しなければならなかったのか、その詳細をIOCの史料から解き明かそうとした。当時、研究者としてはまだ道半ばだが、これまでに知り得た知見や経験を若い世代の研究者や学生に伝え、チャンスを与えていきたい。そしてスポーツを通じて人類に貢献するというオリンピズムの意味を問い、具現していくための取り組みを共に考え、さささやかでも実践していきたいと思う。

在外研究の貴重な機会を与えてくださった本学に心より感謝いたします。

IOCの膨大な史料ひもといて

IOC理事であった猪谷千春氏の紹介を得て、緊張気味にIOC本部の扉のベルを押したことを覚えている。温かく迎えてくださったのは事務局長（当時）のフランソワーズ・ツヴァイフェル氏だった。そこで夢中でコピーした史料で博士論文を執筆した。

それから30余年が経過した今年の6月23日。IOC設立を記念するオリンピックデーに、オリンピックハウス（IOC本部）は目白押しの行事で賑わっていた。招待を受けたクーベルタン賞の表彰式で、ツヴァイフェル氏に再会。オリンピック研究に携わるようになってからの歳月が蘇ってきた。

令和５年度事業計画

学校法人国士舘

はじめに

本年度事業計画では、これから予測されるウィズコロナ時代、わが国の少子化、18歳人口漸減など私学を取り巻く厳しい環境を見据えつつ、本学園の発展に向けて着実に進めるものとしています。

ハード面では、「世田谷キャンパス校舎の建て替えに伴う環境整備計画」の基本構想及び基本計画の策定を、ソフト面では建学の精神に基づく大学のカリキュラム改革、全学共通教育科目の在り方及び学生への支援策等を検討の柱とする「教学マネジメント推進委員会」の設置をしました。

本学園のさらなる発展に向かって本学園教職員の叡知とアイデアの結集が求められることからも、法人と教学が一致団結、一致協力のもと、推進してまいります。

１　事業の概要

(1)キャンパス環境整備計画の推進

令和4年10月1日に設置した「国士舘キャンパス環境整備計画推進プロジェクト会議」において、竣工から50年を経過している世田谷キャンパス校舎の建て替えに伴う環境整備計画の基本構想及び基本計画を策定して推進します。

(2)ウィズコロナにおける教育環境の整備

コロナ禍の終息を見据えた本学園のウィズコロナ時代に対応した対面授業とともに、効果的なオンライン授業の教育環境を整備します。

(3)施設・整備

〔世田谷キャンパス〕体育・武道館（1・2階）空調機器の更新、中央図書館（1～5階）ウォールスルー空調機器の更新等

〔町田キャンパス〕メイプルホール外壁塗装及び屋上防水、第4体育館の床補修等

〔多摩キャンパス〕21・25号館空調機器の更新、18号館・レスリング場・剣道場の照明（LED）の設置、武道棟の屋根修理、駐車場の舗装

〔国士舘楓の杜キャンパス〕サッカー場トイレの増設

〔多摩南野キャンパス〕校舎C棟の外壁塗装

〔全キャンパス共通〕メープルSYSに多要素認証システム導入、Webサーバの補強、外部連携認証サーバの増設、人事給与システムの更新

(4)防火・防災・省エネルギー対策

自衛消防班員の個別訓練強化、避難訓練の実施、省エネルギー対策の推進、全構成員へのBLS講習会の実施

(5)管理・運営

学内印刷製本のデジタル化促進、周年事業募金の推進、記念式典・ホームカミングデイの開催、信用格付の受審、監査業務の促進、国士舘史関連事業の展開

２　財務の概要

新たな時代に向けたキャンパス再整備計画が始まります。この基礎となる近時の事業活動収支は、授業料見直し、中途退学者抑制対策、教職員年齢構成の若年化に伴う人件費総額の縮減やマイナスシーリング継続などにより収支差額プラスを維持し、本学園が本来保持すべき積立額である要積立率では、令和3年度決算において、70・7％にまで改善いたしました。今後も財務基盤の健全性を確保し、これを永続するための予算管理に努めることを基本的な考え方として取り組みます。

(1)収入面について

学生生徒定員の確保、募金活動の新たな取組、公的助成金事業への取組、資金運用収入の確保、科学研究費助成金・受託研究費等外部資金の確保

(2)支出面について

教育研究環境の充実に向けた重点的執行、施設・設備関係整備の推進、省エネルギー対策の積極的な推進

主な教育・研究事業

３　大学・大学院

(1)教育・研究

①3つのポリシーを基本とする学修目標の確立
②教育成果の可視化推進
③総合教育カリキュラムの改革
④共通教育科目の再編成
⑤入学前教育の推進
⑥IRの活用推進
⑦教育研究の質保証

本学における「望ましい教員像」の確立、FDの推進、内部質保証の推進、新採用教員研修の実施、SDの推進

⑧学術研究支援の推進

外部研究費獲得の推進、研究倫理教育の徹底

⑨国際交流の推進

海外協定校連携プロジェクトの実施、海外研修の実施、海外協定校交流セミナーの実施、海外留学（派遣・受入）、留学生交流プログラムの編成実施、海外協定校等訪問

⑩スポーツ支援の促進

メディカルサポート体制の推進、学生アスリートサポート体制の構築、スポーツカウンセリングルームの開設と運用、学生アスレティックトレーナー（AT）チームの運営

⑪高大接続の強化推進
⑫TA・SAの活用促進
⑬各学部の取組

フレッシュマン・ゼミナールの強化、防災教育プログラムの再編成、各学科の案内パンフレット作成（政経学部）、ICT教育の推進、競技者育成プログラムの増進（体育学部）、実験装置機器の新規導入、学部創設60周年記念事業の計画実施（理工学部）、法律討論会の実施（法学部）、アドバンスト講座の開講、入学前教育（ウェルカムデー）の促進、学部広報の推進、学部独自のキャリア形成教育の促進（文学部）、海外研修プログラム再開（21世紀アジア学部）、優良中堅・中小企業の調査研究の推進、入学前教育の推進、初年次教育の推進、資格取得教育の推進、キャリア教育の推進（経営学部）

⑭大学院の取組

入試説明会の開催（大学院全体）、カリキュラム改革に伴う広報活動の強化（経済学研究科）、カリキュラム等の見直し（救急システム研究科）、弁理士による都民特許無料相談会（総合知的財産法学研究科）、21世紀アジア学部との連携による5年コースの推進（グローバルアジア研究科）

⑮各研究科の取組

研究発表への助成促進（全研究科）、留学生支援の促進（経営学研究科）、ICT教育の推進、国際交流の推進、合同研究の推進（救急システム研究科）、海外協定校との交換講義の推進（法学研究科）、国家試験対策の促進（総合知的財産法学研究科）、特別講義の開講（人文科学研究科）

⑯附置研究所の取組

災害とドローン運用プログラムの設置、教育プログラムの構築、アジア諸国における病院前救急医療体制構築支援（防災・救急救助総合研究所）、子ども対象の「沖縄自然体験教室」、高齢者の健康増進プログラム「健寿の駅」及び「TAMAフレイル予防プロジェクト」の推進（詳細はホームページに掲載しています）

(2)図書館の環境整備

AI・データサイエンス教育プログラム関連資料の拡充、利用者サービスの推進、研究成果の公開

(3)学生支援

①キャンパスライフの支援
②事故防止対策の促進
③キャンパスマナーの向上促進
④キャリア・就職支援の推進

ガイドブック作成・配布、ガイダンス・個別指導の促進、インターンシップ参加の促進

⑤健康管理の推進

健康に関する情報提供の促進、感染症防止対策の促進

⑥福利厚生の充実促進

(4)キャンパス地域・社会貢献

コンソーシアム及びプラットフォームの推進、地域連携活動、地域防災活動、太宰府市との交流促進、地域連携・社会貢献推進センター事業の推進

(5)広報活動

募集広報の促進、募集企画の拡充、国士舘ブランドの広報促進

４　高等学校・中学校

ICTの活用、運営体制の見直し、中等部100周年事業、高大接続の促進、英語教育の促進、防災教育の推進、募集・広報活動の推進

（詳細はホームページに掲載しています）

学校法人国士舘の規模等の概要

（令和５年５月１日現在）

■各キャンパスの土地面積
世田谷　56,772㎡、町田　90,019㎡、多摩　160,749㎡、国士舘楓の杜　42,335㎡、多摩南野　21,194㎡　計371,069㎡

■設置する学校　（　）内は修学キャンパス
国士舘大学（世田谷・町田・多摩）＝大学院、政経学部、体育学部、理工学部、法学部、文学部、21世紀アジア学部、経営学部
国士舘高等学校（世田谷）＝全日制課程、定時制課程
国士舘中学校（世田谷）

■学生・生徒数

国士舘大学大学院	288人
国士舘大学	12,398人
国士舘高等学校	1,021人
国士舘中学校	138人
計	13,845人

■役員・教職員の概要

役　員　等：理事・監事・評議員	計 45人
専任教員：大学312人、高等学校47人、中学校９人	計368人
非常勤教員：大学623人、高等学校32人、中学校２人	計657人
専任職員：法人69人、大学138人、高等学校５人、中学校１人	計213人

空手道部 創部初の快挙

女子組手 嶋田選手が金メダル

残り1秒で逆転勝利

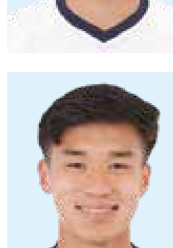
上段蹴りを放つ嶋田選手（青）＝JKfan提供

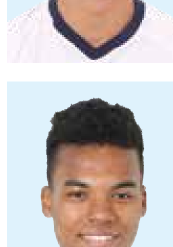
KARATE1プレミアリーグ

世界空手連盟のシニア公式国際大会であるKARATE1プレミアリーグ2023が、6月9日から11日にかけて福岡国際センターで開催され、嶋田さらら選手（体育4年）が女子組手61㌔級で優勝した。本学空手道部の女子組手での世界大会優勝は、創部以来初めて。

決戦ではドイツの選手を相手に2点を先制されるが、積極的に間合いを詰めて突きで有効を取り、1点差まで縮める。残り43秒で上段突きを決め同点とするも相手の技も認められ2−3に。最後まであきらめない嶋田選手は残り3秒で相手の上段突きをかいくぐって中段を突き、土壇場で同点に追いついた。残り1秒で試合再開すると、最後の隙をつき上段の連続突きを繰り出し、それと同時に試合が終了した。会場内の緊張感が張り詰める中、審判団VR判定による協議の結果、嶋田選手の最後の突きが有効と判定され、4−3で逆転勝利となり見事優勝の栄冠に輝いた。

3選手 Jリーグ内定


山田裕翔選手


古川真人選手

望月ヘンリー海輝選手

2024年シーズンから、本学サッカー部に所属するDF・山田裕翔選手（体育4年）とFW・古川真人選手（21ア4年）がJ2チームの東京ヴェルディに、DF・望月ヘンリー海輝選手（体育4年）がJ2チームのFC町田ゼルビアにそれぞれ加入することが内定した。

山田選手はセンターバックとして絶対的な対人能力を持ち、昨年には全日本大学選抜に選出され、今季は主将としてもチームを牽引している。

古川選手は闘志溢れるプレーでチームをけん引する大学サッカー界屈指のストライカーで、望月選手は192㌢の身長を武器に攻撃参加を得意とする大型サイドバック。

3選手とも、プロ入り後の活躍が大いに期待される。

日本サッカー殿堂入り

大澤理事長 JFAが顕彰

公益財団法人日本サッカー協会（JFA）が6月22日、第19回日本サッカー殿堂掲額者を発表し、大澤英雄理事長の日本サッカー殿堂入りが決まった。

大澤理事長は、本学サッカー部初代キャプテンを務め、卒業後は指導者として数々の有力選手を輩出するなど同部の発展に寄与したほか、全日本大学サッカー連盟理事長、関東大学サッカー連盟会長、日本サッカー協会理事などを歴任。少年サッカー大会の創設やインディペンデンスリーグの創設など数々の功績を残している。

同協会による日本サッカー殿堂掲額式典は、9月10日に都内で行われる予定。

出場権 7年ぶり伊勢路

全日本大学駅伝

全員でガッツポーズ

秩父宮賜杯第55回全日本大学駅伝対校選手権大会・関東学生陸上競技連盟推薦校選考会が6月17日、神奈川・相模原ギオンスタジアムで行われ、本学が7年ぶり12回目の本戦出場を決めた。

第4組に出場したピーター・カマウ選手（21ア3年）は、トップ集団に食らいつきベストタイム28分19秒48を叩き出した。続く中島弘太選手（体育3年）も、粘り強く走り切り、ベストタイムの力走で出場権獲得に貢献した。

選考会には20校が参加し、各チーム2人ずつ4組に分かれて1万㍍を走り、8人の合計タイム上位7校に全日本大学駅伝の出場権が与えられる。

令和4年4月から指揮を執る小川博之監督就任後初の出場となる。本戦は11月5日、名古屋・熱田神宮から三重・伊勢神宮の区間で行われる。

小林選手 チーム優勝

小林唄選手

岩崎尽真選手

ASワールドカップ仏大会

アーティスティックスイミング（以下AS）ワールドカップ2023が5月5日から7日にかけてフランス・モンペリエで行われ、日本代表の小林唄選手（体育3年）がチームフリールーティンに出場し、見事優勝を果たした。

岩崎選手が5年連続2冠

日本ASチャレンジカップ

6月9日から11日に行われた、日本ASチャレンジカップ2023では、岩崎尽真選手（体育2年）がソロ2種目に出場し、5年連続2冠を達成した。

本学シンクロナイズドスイミング部に所属する両選手が国内外で大いに活躍した。

学生アスリートを心理学的にサポート

スポーツカウンセリング開始

国士舘スポーツプロモーションセンターでは、学生アスリートのサポートの一環として「スポーツカウンセリング事業」を5月から開始した。

本事業は、学生アスリートの競技力向上・実力発揮に必要な心理スキルの習得や、心身の健康や人格的成長を図るもので、スポーツ心理学の理論に基づく体系的で教育的な活動。

具体的には、スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士の資格を持つ相談員がメンタルトレーニング、メンタルヘルス、カウンセリングなどのサポートを行う。

相談員は、秋葉茂季体育学部准教授のほか、非常勤2人の計3人が務め、交替制で多摩キャンパスに週4日常駐する。学生からの相談内容は守秘義務を守りつつ、各クラブ指導者とも協力して、より良い競技環境の構築を目指す。

ラグビーリーグワン16試合でメディカルサポート

支援チーム初優勝

万が一に備え、事前に搬送方法を確認する様子

本学は、ジャパンラグビーリーグワン2022−23で「クボタスピアーズ船橋・東京ベイ」および「リコーブラックラムズ東京」の2チームにメディカルサポートとして協力した。今シーズン開幕以降、本学は16試合にわたり救急救命士の資格を有する教職員および大学院生延べ31人のほか、本学学生アスレティックトレーナーチーム所属の学生88人を派遣し、選手および観客の救護体制を担った。

5月20日に行われたプレーオフトーナメント決勝では、本学とフレンドシップ協定を締結するクボタスピアーズ船橋・東京ベイが勝利し、初優勝を果たした。

活躍するスポーツ

【柔道】
●2023チェコジュニア国際大会（6／3〜4）
60㌔級
優勝　松永烈（体1年）
90㌔級
優勝　川端倖明（国士高3年）

【サッカー】
アミノバイタルカップ2023 第12回関東大学サッカートーナメント大会（6／16〜7／2）
優勝　国士舘大学

【レスリング】
●明治杯全日本選抜選手権（6／15〜18）
男子フリースタイル
92㌔級
3位　持永空弥（体4年）
●JOCジュニアオリンピックカップU20（4／15〜16）
男子グレコローマン
77㌔級
2位　島袋希理瑠（体1年）
97㌔級
2位　加藤大翔（体3年）

【硬式野球部】
●東都大学野球春季リーグ戦
2部3位　国士舘大学

【ハンドボール部（男子）】
関東学生ハンドボール連盟春季リーグ戦
1部2位　国士舘大学

【新体操】
●第14回アジアシニア選手権大会（5／31〜6／3）
団体総合
3位　稲木李菜子（21ア2年）
●第56回東日本学生新体操選手権大会（5／12〜13）
女子団体総合・団体種目別〈リボン・ボール〉
優勝　国士舘大学A
団体種目別〈フープ〉
2位　国士舘大学A
女子個人総合
優勝　小西野乃花（21ア3年）
2位　岩永茉莉亜（体3年）
男子団体総合
優勝　国士舘大学
3位　国士舘大学B
男子個人総合
優勝　森谷祐夢（体3年）

【バスケットボール部（男子）】
●東京都夏季バスケットボール選手権（6／3〜7／2）
優勝　国士舘大学A

【準硬式野球部】
●東都大学準硬式野球春季リーグ戦（3／30〜5／31）
2部優勝　国士舘大学

柔道男子 16年ぶり日本一

悲願の優勝をつかみ取った団体メンバーら

雪辱に燃え宿願達成

女子も健闘 準優勝

全日本学生柔道優勝大会

体重無差別の団体戦で争う全日本学生優勝大会が6月24・25日、東京・日本武道館で行われ、男子が16年ぶり、通算7回目の日本一をつかんだ。

登録選手全員が丸刈りにして大会に臨むほど本学の今大会にかける思いは強かった。昨年の同大会決勝で東海大に代表戦の末に敗れ、新チームでは「雪辱」をスローガンに稽古を積んできた。

本学は初戦から圧巻の内容で決勝に進出すると、昨年と同カードの、7連覇を狙う王者東海大との頂上決戦となった。

迎えた決勝では、次鋒の小田桐美生選手（体育3年）が50㌔近い体格差の相手に合わせ技一本で先制点を奪うと、以降は引き分けが続き1−0で副将の斉藤立選手（体育4年）につないだ。

昨年の代表選で屈辱を味わった斉藤選手は闘志を全面に出し、内容圧倒の反則勝ちで大将戦を前に優勝を決め、大将戦でも1勝を奪い3−0の完勝で雪辱を果たした。

優勝後のインタビューで吉永慎也監督は「強豪校が揃う中で勝つことの難しさを痛感していた16年間だった。本大会日本一は、OBの悲願でもあった」と涙を浮かべながら喜びを口にした。

また、同大会では、女子が準優勝となるなど、本学の活躍が際立った大会となった。

斉藤選手 勝利呼ぶ

日本が団体6連覇

世界柔道

柔道・世界選手権が5月7日から14日までカタール・ドーハで開催され、14日に行われた混合団体の決勝で日本はフランスに4−3で競り勝ち、6連覇を達成した。メンバーには同大会100㌔超級に出場した斉藤立選手（体育4年、写真）も名を連ね、3試合に出場した。

決勝のフランス戦では、1−3と後がない状況で出場した斉藤選手が指導3の反則勝ちで勝利すると、後続も続き見事優勝をつかみとった。

13日に行われた100㌔超級では、斉藤選手が準々決勝でロンドン、リオと五輪連覇のテディ・リネール選手（フランス）に延長戦の末惜しくも敗れた。

授業の現場から No.34

富樫盛典研究室

前列右から2人目が木場田さん、後列中央が富樫教授

工学研究科修士課程1年　木場田（こばた）慶矩

大学院工学研究科の富樫盛典研究室では、流体力学の観点から、社会課題の解決に貢献する研究を行っています。

富樫研究室は、3年生6人、4年生5人、大学院生4人の計15人の学生が在籍しています。私は、学部3年生から在籍しており、今年で3年目となります。

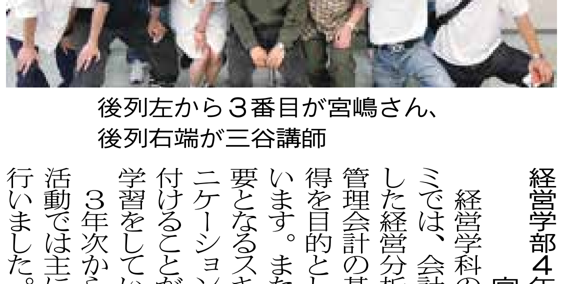
研究内容は、学部4年次の卒業研究のテーマでもある「連続放水式消防用ドローンの開発」を大学院でも引き続き研究しています。具体的には、ドローンを飛行させる際に不可欠なバッテリーの交換や放水時の水の補充をすることなく、長時間連続的に消火活動を行うことができる有線型の消防用ドローンの開発を行っています。

富樫先生は、企業の研究開発部門に25年間在籍された経験から、研究の進め方、実験方法、実証方法、プレゼンテーション資料の作成方法まで、とても真摯にご指導くださいます。

6月27日には、ゼミ合宿として、富樫先生を含めた10人の研究室生が千葉県の幕張メッセで行われた「ジャパンドローン2023」というドローンの展示会に行きました。ドローンの展示会としては日本最大級の規模なので、有名な企業や団体が多数出展しており、ドローンを主体に研究している身としては、大変勉強になり、良い刺激を受けました。また、展示会では学部4年次の研究内容を発表する機会にも恵まれました。

富樫研究室に入り、研究をはじめ課外活動など、とても充実した学生生活を送ることができていると感じ、大変良かったと思っています。

三谷華代ゼミ


後列左から3番目が宮嶋さん、後列右端が三谷講師

経営学部4年　宮嶋 佑汰

経営学科の三谷華代ゼミでは、会計情報を利用した経営分析、経営学・管理会計の基礎知識の習得を目的として活動しています。また、実務で必要となるスキルやコミュニケーション能力を身に付けることができるよう学習をしています。

3年次から始まるゼミ活動では主に企業分析を行いました。興味のある業界から2社を選択し、業界の状況を調べたうえで、各社の経営状態を3〜4人のグループで分析します。さまざまな指標の数値の変化についてグループで資料を集めてその背景を分析し、プレゼンテーションにまとめてグループごとに発表が行われます。4年生になった現在は各自興味があるテーマについて卒業論文の執筆を行っています。

経営学などの基礎知識が身に付くのはもちろんですが、それ以上に普段の授業では学ぶことができない実践的な知識や経験を得ることができました。限られた時間の中で効率的に発表資料を作成するため、他者に配慮したコミュニケーションで相互理解を深め、適切に役割を分担することで仲間と一緒に問題を解決する力が培われました。また、なぜその分析結果になるのかということを徹底的に追及した経験は、自己分析や企業研究などの就職活動においても役立ちました。

学習面だけでなく、新入生歓迎会やゼミ合宿、追いコンなどのイベントもあり、OB・OGを交えて学年関係なく交流が行われるため、より一層大学生活を楽しめています。卒業までに一回り大きな人間に成長できるよう仲間と一緒に頑張りたいと思います。

国士舘創立110周年記念事業の寄付金募集

募金の趣意

国士舘は、創立100周年記念事業（2006〜2018）を完了し、「第1次中長期事業計画（2015〜2019）」を経て2019年に新たなビジョン「第2次中長期事業計画（2020〜2024）」を公表しました。第2次中長期事業計画では、第1次から推進してきた「地域防災力向上のための防災リーダー養成教育に関する研究拠点の構築」の完成を目指します。また、防災教育・研究をはじめ各キャンパスの教育・スポーツ施設の整備を進めます。これらの取り組みにより、本学園の長期にわたるこれまでの改革を更に推進し、私学を取り巻く厳しい環境下で競争力を高めるための計画事業を完遂し、学園改革の総仕上げを目指します。来る創立110周年に向け、本学園のビジョン実現に全力を挙げてまいります。

わが学園が「世のため人のために尽くしうる有為の人材の養成」の建学の精神のもと、国士舘独自の教育をもって発展を続けていることにご理解を賜り、創立110周年記念募金事業計画に温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。

● 募金目標額：10億円
● 募集期間：令和2(2020)年4月〜令和10(2028)年3月（8年間）
● 寄付の方法：個人でお申込みの場合、オンライン決済と金融機関から振込む方法が選択できます。

オンライン決済ご利用の場合	金融機関ご利用の場合
クレジットカード・コンビニエンス払い・Pay-easy（インターネットバンキング）をご利用の場合は、本学ホームページよりお申込みください。	募金趣意書の巻末にある「払込用紙」でお振込みください。お手元に所定の「払込用紙」がない場合はお送りしますので右記へお申込みください。

※法人でお申込みの場合は、お問い合わせください。
※税制上の優遇措置もございます。詳細はお問い合わせいただくか、本学ホームページをご覧ください。

募金の概要

期　別	主な事業項目
通　期 (2020/4〜2028/3)	▶ 学生・生徒への修学支援事業
	▶ スポーツ・文化活動の振興
	▶ 国士舘大講堂（国登録有形文化財）の保存および防災対策
	▶ 高等学校・中学校の教育環境の充実
	▶ 3キャンパスの教室等の重点整備
	▶ 防災教育の推進強化
	▶ 世田谷キャンパスの再整備の検討
第1期 (2020/4〜2022/3)	▶ 町田キャンパスの整備
	▶ 国士舘楓の杜キャンパスの運用開始
	▶ 多摩キャンパスの拡充整備
	▶ 近隣の救急病院等との連携構築
第2期 (2022/4〜2025/3)	▶ 多摩南野キャンパスの整備
	▶ 国士舘楓の杜キャンパスへのスクールバス運行
第3期 (2025/4〜2028/3)	▶ 5キャンパスの施設環境の充実

※上記の「主な事業項目」は、計画の具体化により若干の変更を伴います。
また、寄付金は、総事業費の一部に充当させていただきます。

寄付金募集の報告

国士舘創立110周年記念事業募金の趣旨にご賛同賜り、皆様からの心温まるご支援をいただきました。ご厚志に感謝申し上げます。

● 寄付者区分内訳　（令和5年6月30日現在）

区　分	寄付件数	寄付額
篤志者	48件	3,271,000円
卒業生	1,083件	24,399,918円
学生・生徒の父母	282件	7,280,000円
教職員等	388件	36,486,224円
法人・団体その他	54件	224,198,715円
合　計	1,855件	295,635,857円

< 募金についてのお申込み・お問い合わせ >
学校法人国士舘 募金事務室
創立110周年記念事業募金委員会
東京都世田谷区世田谷4-28-1
Tel：03-5451-8207

寄付のご案内